

キャリア教育とジェンダーに関する一考察

寺崎里水（お茶の水女子大学）

学校の出口部分での振り分けが活動の中心となっていた「進路指導」から、職業選択あるいは職業生活を通じた自己実現にむけて教育活動を組織する「キャリア教育」へと指導のあり方が変化したことは、単なる指導方針の変化にとどまらない重大な意味をもっているのではないか。本報告はこのような関心にに基づき、とくにジェンダーとの関係から、現行のキャリア教育の問題を明らかにする。

A. キャリア形成と社会構造

近年、学校から職業生活への移行の長期化・不安定化が指摘されるなかで、移行過程は、Youth から Adult への一方向の矢印としてではなく、多次元かつ複雑な構造をもつ「軌道 trajectory」として把握されるようになってきている。移行期が複雑化するなかで職業生活を含めたキャリア・プランニングは、以前にもまして選択の重要性を高めている。

とりわけ個人にとっての職業選択は、個人が社会にどのような位置取りを行うかという社会移動の問題であり、同時に個人の社会参加の方法を規定する重要な意味を持っている。たとえば教育が個人の人々の多様な選択を尊重するといったとしても、実際の労働市場の仕組みとしては、すべての選択に対して同等の報酬が与えられるわけではなく、社会（市場）において価値が認められるものにだけ高い報酬が与えられることになる。その意味で、それぞれが職業生活を通じた自己実現にむけて努力することが大事だといったメリトクラシー言説や、個人々の選択を等しく尊重するといった教育的言説は、社会的地位達成の手段としての職業の役割から目を背けさせる「騙し」の言説といえる。

また、個人は規範的構造へと社会化されており、その構造が個人の選好や可能な選択肢の認知を形成する。「軌道」の形成過程のみならず、そもそもどういったキャリア

を望ましいと思うかに対して、個人々の利用できる資源は限られているのである。子どもの興味・関心があらかじめ外的な構造の影響を受けているということに無頓着なまま、これをキャリア教育の実践のなかで子どもに内在的なものとして素朴に称揚することは、社会構造の規則性に個人をしたがわせるイデオロギーの作用を助けることになる危険性があるのではないだろうか。

以下ではジェンダーという観点から、キャリア形成と社会構造という問題をみていくことにする。まず先行研究の整理を行い、進路選択からキャリア教育へと指導のあり方が変わったことによって、女子の進路選択に関する諸問題はどのように様相を変えるのか（変えないのか）について考察する。次にやりたい職業を選択するときの動機の語彙に注目し、子どもの「興味」「関心」を重視する現在の指導の仕方が抱える問題を明らかにする。そして、そもそもキャリア教育で用いられる言説に潜むジェンダーバイアスの問題を指摘する。最後に知見を整理し望ましいキャリア教育のあり方を示唆する。

B. ジェンダーとキャリア形成

- 1) ジェンダー・トラック（略）
- 2) 学校階層の規定力の変化（略）
- 3) 職業アスピレーションへの注目（略）

C. やりたい理由とジェンダー

図表1は、中学校3年生で保育士・幼稚園教諭を志望する者に、なぜそう思うのかをたずねた結果である。「子どもが好き」ということばが

図表1 保育士・幼稚園教諭をやりたい理由(中3)

子どもが好きだから
子供が好き。幼稚園の時の担任の先生にあこがれて。
子供がスキだから。
小さい子が好きだから。
小さな子供が好きだし世の中の役に立つ仕事だと思うから。
小さい子が好きだから。すぐスキだから。
子供が好きだし、好きなことにチャレンジしてみたいから。
子供が好きだから。
子どもがスキだから。私もようちえんがたのしかったから。
小さい子が好きだから。幼稚園の時、先生っていいなと思ったから。

データ: JELS (Japan Education Longitudinal Study) 2003, 関東地方Aエリアのもの

その「しごと」を選択するほとんど唯一の理由となっている。「子どもが好き」ということは、本来個人的な好みの表明であって、職業的な専門性や適性との関連は見出しにくい。われわれの生活場面では「子どもが好きだから保育士」という理由の表明に対して違和を感じることなく了解される。その背後には「子どもの世話をするのに適した性」というジェンダーの存在があり、これによって「子ども好き」という好みは、職業に対する適性へと変換されているのである。当然のことながら、保育士や幼稚園教諭を志望する者のほとんどが女子であった。

同時に、保育士や幼稚園教諭の職業的専門性が「子ども好き」としてしか表明されていないという別の問題も見出すことができる。女性であるがゆえに子どもの世話をするのに適しているとみなされることにより、保育士や幼稚園教諭の、「子どもの世話をする」、「人を教える」という専門的スキルが過小評価され、子どもを相手とする専門職としての社会的評価を低めるといふ仕組みがそこにあるのではないだろうか。

D. キャリア教育言説とジェンダー

このように考えると、職業生活を中心としたライフコース設計までを含めた「キャリア」概念自体の問題が導き出される。ニートやフリーターの問題が指摘され始めたとき、あるいはその対応としてキャリア教育が推進され始めたとき、その視野に女性ほどの程度含まれていただろうか。「望ましい職業観・勤労観」を若者が失ったとするキャリア教育政策の言説には、女性が労働市場で一人前の労働力としては、なかなか存在してこられなかったことへの言及はない。職業生活を組み込んだライフコースの設計というキャリア教育の掲げる目標は、多くの女性にとってなじみのなかったものである。

さらに、先行研究が明らかにしているように、「働く」「仕事」「キャリア」といったことばは、それ自体、男性に伝統的な働き方、仕事の仕方を基にしたことばである。私たちが「仕事」といったとき、それがいかに伝統的な男性の働き方を想起させるものであるかについて図表2に例を示した。子どもたちに自分の親がどのよう

な「しごと」をしているかを訊ねると、実際には掃除や洗濯、食事の支度といった家事をしているにもかかわらず、母親はしごとをしていないと回答する者が1割程度存在したのである。主に男性が従事しているような労働こそが「しごと」であって、女性が専ら従事している日々のルーティンワークはそうではないという認識が子どもたちのなかに存在している。

したがって、どの労働がキャリアを形成するに足るもので、どの労働はそうでないかといったことは、男性と女性のあいだに平等にばらまかれているのではない。キャリア教育が体系的に育成しようとしている「職業観」や「勤労観」といった価値観についても同様のことがいえる。職業教育やキャリア形成をめぐるこれらのジェンダーバイアスについて無自覚なままキャリア教育を進めると、誰がキャリア教育の提示する価値規範によりよく適応できるかについて、差異が生じるだろう。

E. まとめ

現代社会において、男性もまた一生涯、安定して働き続けるという伝統的なキャリア形成をイメージすることができなくなっている。自らのキャリア形成を主体的に行うことができる個々人の育成は、男女にかかわらず、また家族を持つ場合にも持たない場合にも、これからの社会において重要な課題である。ゆえに個々人の「軌道」をつくりだす選択が、あらかじめ外的な構造に規定されていることに、我々は自覚的でなければならない。全世界的なライフコースのあり方の変化、家族形成の変化を念頭において、従来の「職業観」「勤労観」「働く」「仕事」といったことばの見直しを、まずキャリア教育は行うべきなのである。

(文献等は当日配布レジュメに記載)

図表2 子どもの親の「しごと」に対する認識

	父親			母親		
	小3	小6	中3	小3	小6	中3
職種・業種として分類可能	47.3	51.7	45.3	28.5	33.5	28.2
会社名のみ	10.1	9.1	8.5	10.9	5.0	2.5
サラリーマン・会社員・OL	8.9	7.4	8.6	0.4	0.4	0.7
主婦	0.0	0.0	0.0	14.6	12.1	12.1
しごとをしていない	0.3	0.0	0.1	7.3	10.2	6.1
パート・アルバイト・内職	0.4	0.0	0.2	4.0	6.5	12.9
わからない・知らない・その他	33.0	31.8	37.3	34.3	32.3	37.5

出典) 寺崎・中島(2005)56頁図表Ⅲ-11を再集計して作成。

データ: 図表1と同じ